

**令和8年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業
実施計画書**

活動団体の本事業での活動テーマ

『山10日海10日里10日

水のめぐりと共に生きる流域文化が息づく島』

活動団体の活動地域：屋久島町

活動団体名：合同会社モスガイドクラブ

中間支援主体名：NPO法人HUB&LABO

Yakushima

参加団体の基本情報

(1) 活動団体の基本情報

団体名	合同会社モスガイドクラブ
活動地域	屋久島
専門性・強み	
#エコツアー #宿泊事業 #流域プログラム #生活文化の伝承 #環境教育 #年間1000名規模 #環境再生プログラム #杉山再生 #耕作放棄地再生 #自然体験 #フィールドワーク #地域資源活用	

団体概要
2003年、屋久島でエコツアー事業を開始。観光の質と地域との関係性に向き合い、2006年にはオーバーツーリズムへの危機感から、里に拠点を移し「モスオーシャンハウス」を開設。自然と共に暮らし、学ぶ場づくりを進めてきた。企業研修や長期滞在型の流域プログラムを通じ、多様な価値観が交わる機会を創出。2020年にはSumu-yakushimaを建設し、リジェネラティブな暮らしの拠点として世界的な評価を得た。現在は「流域のがっこう」設立に向け、自然環境と地域コミュニティの再生に挑んでいる。

(2) 中間支援主体の基本情報

団体名	NPO法人HUB&LABO Yakushima
活動地域	屋久島
専門性・強み	
#探究型学習 #キャリア形成支援 #人材育成 #地域づくり #コミュニティデザイン #アートと創造活動 #創造的な学び #中間支援組織 #未来をつくるプラットフォーム #教育とアートの融合 #地域と人をつなぐ #ESD・SDGs教育	

団体概要
HUB&LABO Yakushimaは、「関係性をデザインすることで豊かさをアップデートする」をミッションに、「青い地球と共に生きる文化」の実現を目指すNPO法人です。環境教育や地域づくりを通じて持続可能な未来を共創するプラットフォームを構築。環境系学生未来塾、島子屋、ビーチクリーン、未来会議など多様な実践を展開しています。世界自然遺産・屋久島の地を生かし、人と自然、人と社会の関係性を再構築する学びと対話の場を育みながら、ローカルとグローバルの視点を行き来し、次世代に希望をつなぐ社会の創造に挑んでいます。

活動団体と地域の紹介

【地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み】

屋久島では、山・里・海が一体となった流域ごとに独自の生活圏や生業が育まれてきた歴史がある。行政区では捉えきれない自然と暮らしのつながりを重視し、本事業では「流域」を活動単位として設定。高平流域を起点に多様な主体と連携し、各管理セクターのキーパーソンとの関係性を構築。役割分担と協働体制が整い、共通のビジョンに基づく持続的な活動が展開される地域プラットフォームが形成されつつある。

【ローカルSDGs事業として取り組む内容】

○高平日曜市の活性化

棚田を復元しビオトープとして機能させ、森里川海の物質循環をつなぐ中間地点を回復し、耕作放棄地を再生する。また、農作物を地域の日曜市で販売し流域自給率の向上を目指す。農地は関係人口の交流拠点としても活用し、農地を持たない移住者も巻き込み、人材循環へとつなげる。

○リジェネラティブツアー勉強会および企画WSの実施

高平流域を起点に、源流域を含む森・里・川・海における資源循環と水環境との共生を体験できる流域文化プログラムを地域事業者と創出するプロジェクト。

地域の基礎情報

市町村名

鹿児島県熊毛郡屋久島町の南東部、屋久島沿岸に位置する小規模な集落。温暖多雨の自然環境のもと、柑橘類栽培を中心とした生業が営まれている。高齢化が進む一方、Uターン者も多く自治会活動や伝統行事など地域の助け合い、結びつきが強い。

地域の課題

高平流域では、戦後に植林された杉林の荒廃や保水力の低下による小川の枯渇、農地の放棄や鳥獣被害の増加、山との関わりの減少、高齢化による管理負担の増大など、環境と暮らしの両面で多くの課題を抱えている。商店や飲食店の不在、住居の分散による集まりづらさも、日常生活の不便さを生んでいる。

地域の自然資本、資源

- 開拓集落ならではのフロンティア精神や新たな挑戦を受け入れる文化、Uターンやアイターン者の増加、子どもの多い育成会の存在など
- 豊かな水資源

活動団体の目指す地域の姿【R8当初計画】

■地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

地域循環共生圏が目指す姿は、森・里・川・海がつながる流域の循環を基盤に、自然と人の営みが調和した暮らしが持続する地域である。屋久島の流域文化である「山10日・里10日・海10日」の営みを再生し、その価値をもとに多様な主体が関わり合いながら、流域単位での自治的な社会を形成する。森里川海の自然資本と生物多様性を再生しつつ、衣食住・エネルギー・水環境を流域単位で自給・循環させ、資源を地域住民自らが管理するコモンズとして保全することで、自立分散型の持続可能な地域社会を実現する。

■地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

屋久島では、山・里・海がつながる流域ごとに暮らしや生業が育まれてきた。本事業では行政区に依らず「流域」を活動単位とし、高平流域を起点に、地域住民、農林漁業者、観光事業者、教育機関、行政、研究者、NPOなど多様な主体と連携。各分野のキーパーソンとの関係性を基盤に役割分担と協働体制を構築し、共通ビジョンに基づく持続的な地域プラットフォームの形成を進めている。

■ローカルSDGs事業として取り組む内容

棚田を復元しビオトープとして再生することで、森里川海の物質循環をつなぐ中間地点を回復し、耕作放棄地の再生を図る。農産物は日曜市で販売し流域自給率を高めるとともに、農地を交流拠点として関係人口の参画を促し、人材循環へとつなげる。また、高平流域を起点に、森・里・川・海の循環と水環境との共生を体感できるリジェネラティブツアーを地域事業者と協働で企画・実装し、流域文化の価値を可視化・発信する。

■地域の現状と課題

高平流域では、戦後に植林された杉林の荒廃や保水力の低下による小川の枯渇、農地の放棄や鳥獣被害の増加、山との関わりの減少、高齢化による管理負担の増大など、環境と暮らしの両面で多くの課題を抱えている。商店や飲食店の不在、住居の分散による集まりづらさも、日常生活の不便さを生んでいる。加えて屋久島全体でも、観光偏重による地域経済の偏在や、里地里山の管理不足による生態系の劣化、担い手不足の進行といった構造的課題が顕在化している。山岳部中心の利用に対し、里や沿岸域とのつながりが十分に活かされていないことや、流域単位での資源循環や暮らしの再構築が進んでいない点も大きな課題である。これらにより、本来一体であった森・里・川・海の関係性と、それを支えてきた地域文化の継承が困難になりつつある。

(参考) ローカルSDGs 事業の紹介

『森里海をつなぐ棚田ビオトープ』

【概要】

- ・耕作放棄地を活用し、森と海との繋がりを学ぶフィールド兼、生物多様性と衣食自給を両立するビオトープ型農場を試行。
- ・自給衣プロジェクトとして草木染め工房とコットン栽培の実施、琉球藍の泥藍づくり
- ・収穫した稲藁を活用して足半草履やしめ縄、伝統的門松の作成

【段階】 構想・試験

【実施時期】 2024年度2月から随時更新中

【活用している自然資本・地域資源】

- ・耕作放棄地、田んぼ、ビオトープ、農業用水、竹林、地域の移住者
- ・にこにこ市（地域の日曜市）、過去の土地利用の智慧を知る人

【事業により生じたor 生じそうな成果】

- ・耕作放棄地の再生、湿地の再生による生物多様性の回復、地域の方に気づいてもらえる活動、里の風景づくり
- ・地域の自給率アップ、稲わらの地域活動への利用（運動会や、神事）、地域の子供会との連携

今後の展望

2026年度、地域の仲間が集まりだしたのでメンバーを増やして水田エリアを拡張。また島内の志を同じくする島内の他流域メンバーとも連携

『流域文化』体験プログラムの共創

【概要】

- ・ワークショップに参加してくれた地域事業者とあらためて流域のビジョンの共有をおこなうためのフィールドツアーを開催した（岳参りや塩作りなど）
- ・草木染工房と連携し地域の育成会活動（琉球藍の草木染体験）の実施
- ・皮むき間伐を行っている杉山から杉皮を搬出、ワークショップ棟の屋根に活用

【段階】 構想・試験

【実施時期】 2025年度9月、10月、2026年2月

【活用している自然資本・地域資源】

- ・草木染工房そらのあお
- ・地域の子供会、地域の移住者
- ・近所の川、海、敷地内の琉球藍、杉山

【事業により生じたor 生じそうな成果】

- ・流域文化の醸成、地域事業者との連携による小さな地域循環経済圏の兆し、里の風景の創出
- ・地域の自給率アップ、地域の子供会との連携

今後の展望

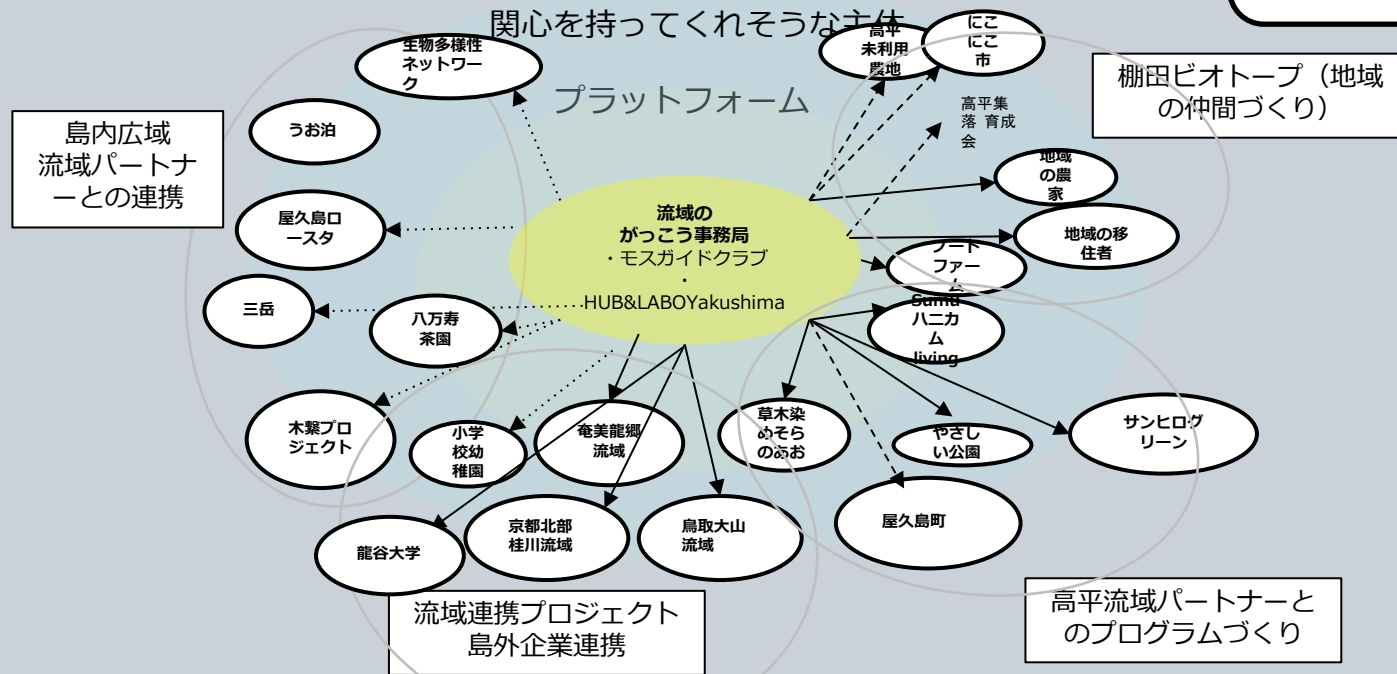
流域文化を伝えるプログラムを地域事業者と共創し、地域でお金が回る仕組みにつなげる。

【開始当初の状況】

- 「山・海・里」の流域を一体として捉え、各地域資源を循環させる構想。
- 流域の学びや対話を軸に、地域住民が自分ごととして地域づくりに参画する「開かれた場」。
- 関係性づくりを重視し、外部専門家ではなく「地域の人」が先生になるスタイルを採用。
- ローカルSDGs事業と連動し、持続可能な経済・環境・社会の統合的発展を目指す。

【現在の地域PFイメージ】

流域のがっこうプラットフォーム

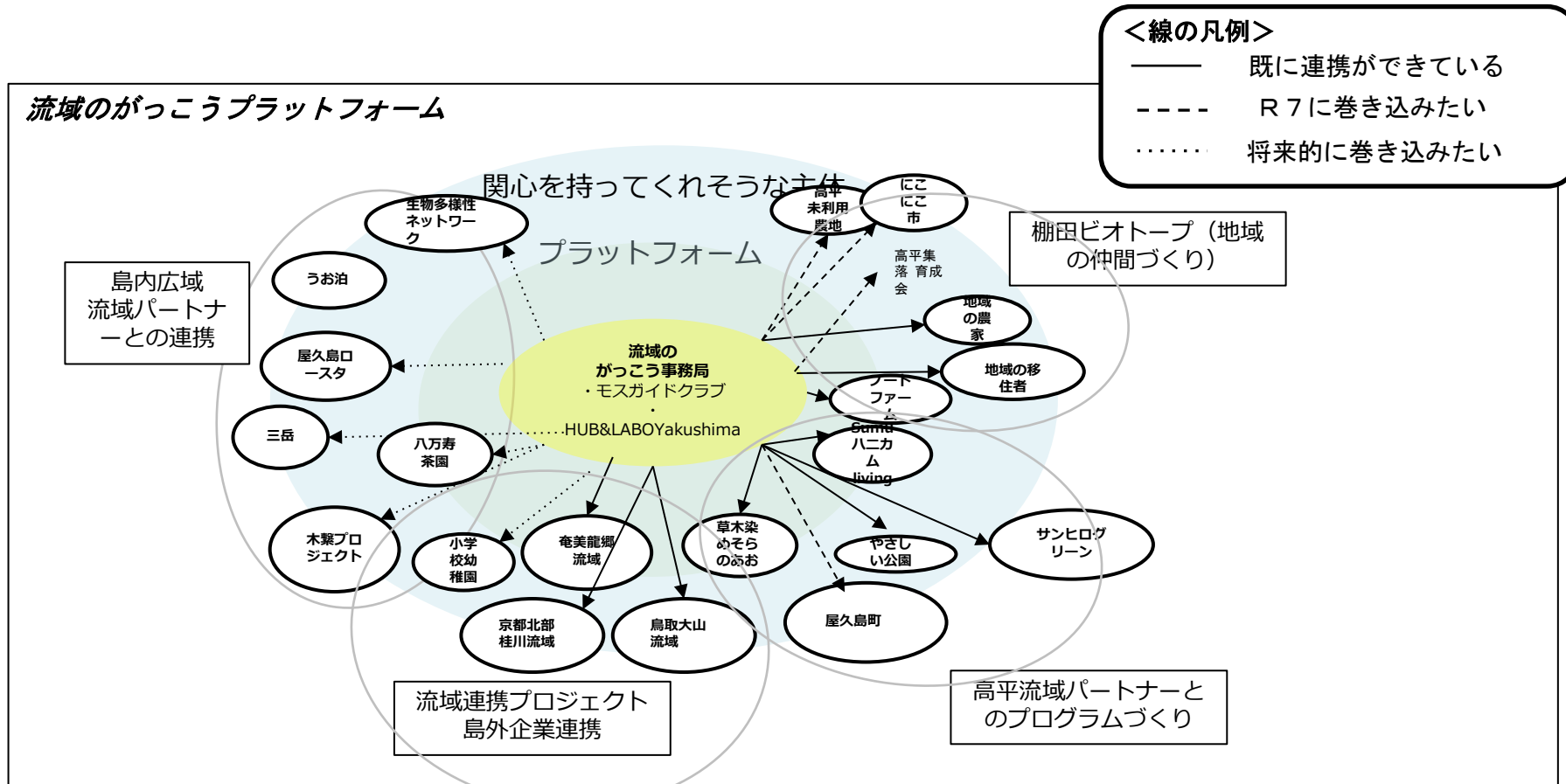


<線の凡例>

- 既に連携ができています
- R7に巻き込みたい
- 将来的に巻き込みたい

- 「山・海・里」の流域を一体として捉え、各地域資源を循環させる構想。
- 流域の学びや対話を軸に、地域住民が自分ごととして地域づくりに参画する「開かれた場」。
- 関係性づくりを重視し、外部専門家ではなく「地域の人」が先生になるスタイルを採用。

(参考) 現状の地域プラットフォーム



- 「山・海・里」の流域を一体として捉え、各地域資源を循環させる構想。
- 流域の学びや対話を軸に、地域住民が自分ごととして地域づくりに参画する「開かれた場」。
- 関係性づくりを重視し、外部専門家ではなく「地域の人」が先生になるスタイルを採用。

(参考) 現時点のマンダラ



3カ年状態目標

■2027年度末の状態目標

森・里・川・海をつなぐ「水の循環を基盤とした流域循環モデル」が地域に定着し、複数の共創プロジェクトが持続可能な事業として継続的に運用されている。環境保全と地域経済が両立するビジネスモデルが確立され、人材・知見・資金の循環が地域内外で生まれている。また、地域の子どもや若者が主体的に関わる仕組みが確立し、流域文化の継承と次世代育成が進んでいる。さらに、屋久島での実践がモデルとして可視化・発信され、他地域への展開や政策との接続が進み、地域循環共生圏の実装事例としての位置づけが確立している。

■2026年度末の状態目標

流域ビジョンを基盤に、地域内外のステークホルダーが継続的に関与する連携体制が構築され、流域プラットフォームとして機能し始めている。水の循環、生物多様性の再生、地域資源活用等をテーマとした共創プロジェクトが複数立ち上がり、企業・研究機関・教育機関・地域住民・行政との協働により、実証的な取組として展開されている。また、棚田ビオトープ、環境教育プログラム、エコツーリズム等を通じて地域内外の交流が活性化し、関係人口の拡大と担い手の育成が進んでいる。さらに、流域課題の構造化と優先テーマの設定が行われ、具体的なアクションプランが複数形成されている。

■2025年度末の成果と振り返り

地域に関わる多様な主体（農業者、観光事業者、教育関係者、移住者）との対話・ヒアリングを通じて関係性の構築が進み、流域（山・里・海）を一体として捉える視点が共有され始めた。また、ワークショップやフィールドでの実践活動（流域のがっこう、棚田再生、日曜市等）を通じて、流域ビジョンの言語化と共通理解の醸成が進み、共創の基盤が形成された。一方で、関係性は構築されつつあるものの、個別の取組にとどまり、流域全体としての構造化や役割分担の明確化には至っていない。また、対話の場から具体的な事業やプロジェクト創出への接続が十分ではなく、実装フェーズへの移行が今後の課題である。

今年度の状態目標に向けた取組内容【R8当初計画】

- これまでの歩み、成果や課題などを踏まえ、今後、プラットフォーム形成・運営のために、今年度優先的にチャレンジしたいアクションサイクルを記載ください。(最低3つ記載ください。)

	優先する アクションサイクル	いつまでに実現するか	実現のために何をするか	実現のために必要なこと (ヒト/モノ/カネ/仕組み/ 機能等々)
①	体制を整える（中間支援機能の強化・事務局機能の確立）	令和8年度上半期中に、流域プラットフォームを支える中核的な事務局体制を確立する。	会議運営、進行管理、関係者調整などの基本機能を整理し、事務局の役割と業務フローを明確化する。	事務局人材の確保および謝金の確保、会議運営費の確保、関係者調整に必要な時間的・人的リソースの確保。
②	プラットフォームを機能させる（流域構造の可視化と関係性の再編）	令和8年度上半期～中盤にかけて、流域全体の構造整理とステークホルダー連携の枠組みを構築する。	ビジョンマップや関係性図を作成し、流域全体の構造を可視化する。	現地調査や対話に必要な交通費・運営費、可視化に必要な設計・デザイン支援、関係者の参加を促すための調整力。
③	共創プロジェクトを創出・実証する	令和8年度中に、流域テーマに基づく共創プロジェクトを1件以上立ち上げ、実証を開始する。	島ステークホルダーとの対話をもとに優先テーマを設定し、企業・研究機関・地域主体と連携したプロジェクトチームを組成する。	プロジェクト推進人材の確保、専門家・外部パートナーとの連携、活動資金の確保、実証フィールドの整備。
④	成果の可視化と発信	令和8年度後半に、実証プロジェクトの成果を整理し、外部発信を開始する。	プロジェクトの成果やプロセスをビジョンマップ・レポート・ストーリーとして可視化し、ウェブやイベント等を通じて発信する。また、他地域や企業・研究機関との連携を促進する。	情報発信に必要な編集・デザイン機能、発信媒体の整備、外部連携を推進するためのネットワーク。

中間支援主体の支援・取組計画【R8当初計画】

■中間支援主体の1年間の支援目標

流域（山・里・海）を一体として捉えたビジョンのもと、地域内外の多様な主体をつなぐ中間支援機能を強化し、ステークホルダーの関係性の可視化と対話の場の継続的な運営を通じて、共通認識の形成と役割分担の明確化を図る。

その上で、水の循環を基盤とした流域文化を軸に、具体的な共創プロジェクトを1件以上創出・実証し、環境保全と地域経済が両立する「流域循環モデル」の実装に向けた基盤を構築する。

■支援計画

	活動団体の取組における現状と課題 (見立て)	課題を解決するために必要と考える手段 (打ち手)
①	屋久島においては、山・里・海を一体とした流域のつながりの中で自然と暮らしが営まれてきたが、現在は産業構造や生活様式の変化により、各領域や主体が分断され、流域全体としての関係性が見えにくくなっている。活動団体の取組も個別には展開されているが、流域全体の中での位置づけや他主体との関係性が十分に整理されておらず、地域全体としてのビジョン共有や連携が不十分である。	流域ビジョンの再整理およびゾーニングの高度化を行い、山・里・海の関係性と各主体の役割を構造的に可視化する。 あわせて、ステークホルダーの整理を行い、流域全体を主語とした共通認識の形成を図るとともに、連携関係を具体的なプロジェクト単位へと落とし込み、流域全体で機能する関係性の実装を進める。
②	対話やヒアリング、ワークショップ等を通じた関係構築は進んでいるが、単発的な関係にとどまり、継続的な共創関係や具体的なプロジェクト創出には至っていない。 また、「流域」という概念や価値観の共有が不十分であり、地域課題と各主体の関心・資源が十分に接続されていないため、共通言語のもとでの協働が生まれにくい状況にある。	ステークホルダー対話の場を設計・運営し、地域課題を流域全体の文脈で再定義する。 その上で、フィールドワークや共同体験を通じて流域の価値観を体感的に共有し、企業・教育機関・地域住民など多様な主体をつなぐことで、共通テーマに基づく具体的な共創プロジェクトの創出へと展開する。
③	流域全体の地域課題は複雑に絡み合っているものの、その構造や優先順位が十分に整理されておらず、個別課題への対応にとどまっている。また、流域文化や水の循環に関する取組の価値が十分に言語化・可視化されておらず、地域内外への発信や共感形成が限定的であるため、外部資源の獲得や担い手の拡大につながりにくい状況にある。	ヒアリングや対話をもとに流域課題の構造化と優先テーマの設定を行う。 そのテーマに基づき、企業・研究機関・地域主体と連携した実証プロジェクトを1件以上実施し、その成果を可視化・発信することで、社会的価値を明確化し、資金調達および広域連携へと接続する。 最終的に、水の循環を基盤とした「流域循環モデル」の実装に向けた基盤を構築する。

中間支援主体のありたい姿

■中間支援主体としての本事業を通じた獲得目標とそのための具体的なアクション

活動団体とともにプロジェクトを推進しながら、流域（山・里・海）を一体として捉え、「人と地域」「人と自然」をつなぐ中間支援機能を深化させる。これまでに構築してきたステークホルダーとの関係性や流域ビジョンを基盤に、対話・可視化・接続のプロセスを通じて、共通認識の形成と役割分担の明確化を図る。

その上で、地域内外の多様な主体をつなぎ、共通テーマに基づく共創プロジェクトを1件以上創出・実証することで、地域資源を活用した持続可能なビジネスモデルおよび「水の循環を基盤とした流域循環モデル」の実装に向けた基盤を構築する。さらに、これらの取組を通じて得られた知見や成果を可視化・発信し、地域内外のステークホルダーの共感と参画を促進することで、「つながりを生むエコシステム」の高度化と中間支援組織としての自立性の向上を目指す。

■中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

HUB&LABO Yakushimaは、ビジョンである「青い地球とともに生きる文化」の実現に向け、地域循環共生圏の考え方を基盤としながら、屋久島を起点とした持続可能な地域づくりを推進する中間支援組織としての役割を確立する。そのために、「人と地域」「人と自然」「地域内外の主体」をつなぐハブ機能を担い、流域全体を俯瞰した視点から、対話・可視化・構造化・接続を通じて、地域の共創プロセスを設計・推進する。

本事業を通じて構築した流域ビジョンおよびステークホルダー連携を基盤に、山・里・海を一体とした流域単位での関係性を再編し、各主体の役割や資源の循環構造を明確化する。その上で、流域課題をテーマごとに整理し、企業・研究機関・教育機関・地域住民・行政など多様な主体をつなぐことで、共通課題に基づく共創プロジェクトを継続的に創出する。

具体的には、水の循環や生物多様性の再生、里山の再生利用、地域資源を活用した観光や産業の高度化などをテーマとし、実証的なプロジェクトを推進することで、環境保全と地域経済が両立する持続可能なビジネスモデルおよび「流域循環モデル」の実装を図る。また、対話の場やフィールドワーク、共同体験を通じて流域の価値観や自然観を共有し、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点から次世代育成を推進する。これにより、地域内における担い手の育成と、地域外からの関係人口・協働人材の参画を促進する。さらに、これらの実践を通じて得られた知見や成果を、ビジョンマップや構造図、ストーリーとして可視化し、国内外へ発信することで、他地域や政策との接続を図る。これにより、屋久島モデルを地域循環共生圏の実装事例として展開し、再現可能なモデルとしての汎用性を高める。

これら一連の取組を通じて、HUB&LABO Yakushimaは「つながりを生むエコシステム」の中核として機能し、流域を単位とした持続可能な地域づくりを推進するとともに、その仕組みの自走化と継続的な発展に貢献する。

活動・支援スケジュール【R8当初計画】

■スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
プラットフォーム構築のための取組【活動団体】		★ステークホルダーミーティング						★行政ステークホルダーミーティング				★ステークホルダーミーティング 流域未来会議
			★ステークホルダーミーティング					★先進地視察（流域フォーラム参加）				
ローカルSDGS事業創出に向けた取組【活動団体】		★流域のがっこうWS（里山編）						★流域のがっこうプログラム 学生対象モニターツアー		★流域のがっこうプログラム 社会人対象モニターツアー		
			★流域のがっこうWS（畑編）					★流域のがっこうWS（里山）				
中間支援主体の支援・取組計画	<p>月一回の運営主体との定例ミーティング</p> <p>活動団体の各事業に対する企画・運営支援</p> <p>ステークホルダーミーティング開催に向けて企画・運営支援</p> <p>流域未来会議開催に向けて企画・運営支援</p>											

備考（補足説明など必要な場合は記載）